

# 大陸（満州）

## 戦争末期の満州と戦後の苦勞

愛知県 宮本芳男

私は朝鮮咸鏡南道永興という部落で、小学校四年生ごろまで育ちました。そのころは、何事にも負けず嫌いなところがあって、家に帰れば早速机に向かって勉強をしました。机といっても今のような立派な机ではありません。夜は電灯ではなくランプの生活でありました。

ある日、日本人の大工さんが訪ねてきたことがあり、父と挨拶をしていました。「この子が奉植という子だね」と、上手な朝鮮語で話をしたのを覚えています。

話を始めると父は私に「外で遊んできなさい」と言われました。何か意味があるかのようでありました。

当時、父はすでに老年であって、田畑を売却し、長兄の李奉謙の居住地、咸興へ移転していました。長兄は、大正の頃から通称・大山謙太郎と名乗り、後に姓を「宮本」と改姓しても、大山の方が通じ易いようでした。私が咸興へ移在したのは小学校四年生ごろでありました。

学校へ編入する話になりましたが、席が空いていないということで、府立小学校への入学はできませんでした。私は子供ながら悩み、病気になるに床に伏せていました。九月頃になり、南山学院という、奈良天理教団関係の学校の四年生に編入することになりました。

昭和十六年、私の勉学に対する熱意は、兄達の話し

合いがあったらしく、三男である兄の宮本邦男から「お前は東京に行きなさい」と言われ、私は啞然としました。「東京には高等工業学校に通っている義兄玉川義男がいるから、学校のこともすべてアドバイスしてくれる。安心して勉学に励んで良い」と言われ、私は東京への旅に出ることになりました。三兄の宮本邦男と一緒に列車に乗り、永興駅まで同席し、種々なことを話してくれました。

東京駅で下車したときは、ただ啞然として、他の人々と一緒に改札口に進み、見回しても義兄の姿は見えませんでした。高い戸口の下でしばらく目配りしながら捜しますと、学生帽を被った学生が懸命に走ってだれかを捜している様子、この人が義兄でありました。

義兄とともに下宿アパートの小石川区表町一〇九の和田実郎に着いて、奥様に挨拶後部屋に案内されました。その後義兄に「研数学館」入学の手続きをして貰って勉学に励むことになりました。研数学館には、大学専門、高等部専門、中学専門とあって、私は中学専門へ、そして新宿工業土木科乙種、豊島実業学校甲種の

門をくぐることになりました。

その当時、少年航空兵に志願したこともあって、遅かれ早かれ軍隊に行くことになるから、朝鮮の家に帰るよう要望されていたので、朝鮮へと帰りました。帰郷後、咸興駅構内操車係に勤めながら、朝日町青年学校四年生に入学し訓練を受けました。

高齢になり、徴兵検査を受け甲種合格、昭和十九年十一月ごろ、羅南の歩兵第七十三連隊（留守隊）へ入営しました。雪が降った夜でした。直ちに編成され貨車に乗せられ発車、行き先は知るはずありません。幾日乗っていたか覚えもなく、山間に設けられた駅に下車しました。

駅から山を登った頂上は広く、その平屋建ての兵舎に入りました。その兵舎は「旧ソ連兵の兵舎」を修復した建物で、ソ満国境まで八里とのこと、関東軍の一・二・三とか、一・二・四師団と言われていました。私たち初年兵の補充隊らしく、我々の面倒を見てくれる上等兵と軍曹が二人おりました。

私は幹部候補生に受験したく、東京の豊島実業学校

甲種三年の証明書と、朝日町青年学校四年生の訓練手帳を持って申請を完了しました。

数日して、候補生から任官したという少尉殿が見え訓練が開始されました。その内容は、基礎教育と騎馬戦などでした。戦闘の記憶は、ある朝、食事が済み食器を集め終わり、窓を開けて煙草を一服吸い込んだ瞬間、敵の飛行機が飛来して銃撃されました。その後、直ちに我々は舍庭に集合させられ、駄菓子と一杯の酒が交わされ、小銃と弾丸一二〇発が支給されました。我々は関東軍の兵士だと言っても皆真面目に信じてくれませんでした。というのは、その時までは武器を持っていなかったからです。

その後、最初に下車したところに戻り、絶壁のような険しい山に登りました。頂上に達して見たら、見渡すかぎりの平野に見えました。私は夜も昼も判らず眠りながらの進軍でした。新兵として疲れ果てていたので無理ありませんでした。行軍を停止したら目を覚ましました。そこは雑木の茂った山中でありました。今思うと、古年次兵達が構築された森林陣地であった

のでしょう。休憩中、乾パン一袋程、飯盒持参者には米一合の支給でしたが、飯盒を持っている兵隊はいませんでした。煙草とマッチはポケットにいっぱいなるほど配給がありました。

その後、少し先の方へ行軍し休憩となりましたが、野営するには良い場所でありました。しかし、気が張ってよく眠れません。しばらくして渡されたものは、今の名古屋の菓子大須のうしろうのような柔らかさのあるダイナマイトで、これを二本、四本、六本と縛り、それを集め出したとき、歩兵砲か速射砲か分かりませんが、砲声が聞こえました。いつの間にか眠って、そんな夢を見ていたのか、うつつだったのか。すると名前を呼ばれ、「俺だ」「俺だ」と言って三人ほど出ていきました。私はその足音にふと目覚めますと、古年兵もいます。何か不安な落ち着かない夜明けでありました。

話によれば、包帯を巻かれ、担架で運び込んだのだということ。登ってきた道を「回れ右」して進んで、山の麓へ出て、塹壕を掘ることになりました。しかし、

掘る道具、円匙も十字鋏も何も無く、止むを得ず木の根の腐った窪みを探し、身体を隠すようにして頭を上げ周囲を見回すと、兵器を持たぬ丸腰の兵隊が入り乱れていました。自分の小隊がどこだか捜すがわかりません。しかし、私の小隊は銃を持っていたお陰で自分の小隊を見つけることができました。

この場所は地名も判らぬが、敵が攻撃してくるので応戦に行くということを耳にしたこともありました。各隊は混乱しているので自分の隊にはぐれる心配があるから、七人程が一緒になって、飛行機が飛来して来た方向にと山を越えると、兵隊が三人、五人と休憩していました。我々もほっとして、一休みすることにしました。

その時、将官と考える小柄な将官が皮の鞘の軍刀を下げ、上衣は着ず、酒のビンを持って私達の方へ来られたので、立って敬礼をしました。将官の顔は黒く、唇がしまっていて恐そうな顔で「お前が宮本か」と言われました。私は驚いて「ハイ、そうであります」と答えました。すると「そうか」と言いながら、私が登っ

て来た方へ下りていきました。その様子は今でもはっきり覚えています。

今まで、そこに居た兵隊は皆どこへ行ったのか。私は方角を間違えたのか森に入ると、直径五〇センチも六〇センチもある大木が生えて梢が見えず、地面に枯木があつて夜なら一步も踏み入れようもないところに来てしまいました。大蛇のような太い枯木が横たわり、苔が生えている、気味の悪い森林でありました。

一緒になった兵隊達は、野宿の食糧はとうに終わってしまい、煙草は持っていないもマッチが湿って役に立たない。疲れきっているためか、弾丸を一発、二発と捨てていく者がいます。そんな一、二発捨てたって同じだと言って、まとめて捨てようとなりました。その時私は思い出しました。青年学校で学んでいた折、小林教官が「弾丸一発が自分の命を助ける」と言われたことを。

夜が明けて出発、山の頂上の峰へ出て、下へと進む。その日は晴天で日の出の太陽を拝み、清々しい気分になりました。山を下れば、人が住んでいるように見え

ましたが、行き当たりは絶壁のような急斜面で、下りることを諦め、皆は思い思いの場所で煙草を吸いました。下りるところを探す心算で立ち上がった瞬間、向いの峰のどこからか、機関銃を発砲してきました。ハツとして木陰に潜んでいると、向いの峰の五、六カ所から、タタタと、小銃ではない機関銃を撃つてきて、ばさっばさっ、ブシュッブシュッと音がして土煙が立ちます。非常に危険なので、峰を一生懸命逃げ、また山中を彷徨しました。

森林の中に入ると、草が踏み倒されている跡がありました。そんなになっていないような気がします。馬が白骨化して、骨が乾いているのも見ました。周辺は静まり返り、空腹を感じながら歩きました。そこで麓の農家を見つけて尋ねましたら満人でした。私は十円札を出し、手まねで食物を売ってくれと頼むと、しばらくして、金は「不用」といってとうきびの餅にお茶を出してくれました。しかし、餅は固くて食べることができませんでした。

その金は、私が出征の折に餞別の十円札三枚と懐中

時計を貰った時のもの。満人は懐中時計が欲しいようでした。手まねで敵陣地に時計を見て爆弾を持っていくので駄目だと言いました。満人は理解できぬような顔をしていました。

その日は暮れ、また歩いて野宿しました。ある部落について様子を伺うと、山の麓に兵隊が大勢ひそんでいました。そのころから私は寒さを感じ、熱が出て寒いのでどこかに潜ろうとしたことまでは覚えていますが、後は覚えがありません。目を覚ますと部屋の中で、その家の主人は朝鮮人でした。彼は「昨日は兵隊サンが大勢いたが一人も見えない」と言っていました。

次に奥さんが「日本は戦争に負けたげな。隣の部落にソ連兵が大勢いる」と話してくれ、明日はこの部落に来るから軍服を着替えろと言うのですが、自分の衣服はありません。外に出て見ると小さい倉庫のような家が四、五軒あり、何気なしに軒下を見ると農作業着の古いのが差し込まれているので、引っ張りだして着替えました。しかしその夜、ソ連軍は来ませんでした。

翌朝、農家の人に別れを告げ、おぼつかない足取り

で歩きました。部落の門から番人が急に飛び出て、銃を突き付け、満語で「ズボンを脱げ」とのこと。脱ぐと一人の者が禰をしていたのをみて日本語で「兵隊、兵隊」と、顔色を変えながら、私を道路側の畑に押しやりました。

私は無我夢中で、手まねで「違う、違う」と言いましたが無駄で、目の前で一発二発三発と撃たれました。私はここで殺されるのだ、と思いました。この思い出は死んでも忘れることはできない恐怖でした。相手の顔も、服装も、目にしっかりと焼きついて、これから死の世界かと思っていました。

しかし、状況は変わり、私ら仲間三人は二人となり、部落でそれぞれ世話になることになりました。私はマラリアでの衰弱により、一日か二日ごとに発熱しました。そのうち余裕のありそうな家を見つけ、十円札を見せて、食物を買ってくるように頼みました。主人は「ちょっと聞いて来る」と言い、札を持って出かけ、午後四時過ぎに、米、肉を仕入れて帰ってきました。終戦になったので牛を殺しての売買があったといいま

す。

私たちは部落の人に、三日ほど休ませてもらい、着る物も、ちょっとましな物に着替えさせてもらって、わが家に帰るために出掛けました。道路側には空襲で銃撃にあっただけらしい死体があり、軍服、軍靴もぬがされ、皮は乾き、牛の臓物の腐ったような死臭が漂っていました。

月日を知る由も無く、ひたすら歩き続けました。夕方、ある駅に着きました。貨物列車があつて機関車はシュッシュと蒸気を出しながら止まっていました。駅は焼かれ、広場には避難民が溢れ、ごった返して、列車の出るのを待っていました。この駅が朝鮮の最先端の駅ということが分かりました。

時計も金も無く、一円足らずの金で、二人で少々の食べものを食べ、荷車で羅南に着くことが出来ました。ここも駅は焼かれ、残骸を広場に集め、だれかが火を付けた炎が燃え上がっていました。私はまたマラリアで発病、悪寒のため火に近づいても寒い寒いと言っていました。連れが私を引き寄せようとするが熱くて

寄れません。私はますます火に近寄ろうとしましたが、よくもやけどにもならず焼死もせずに済んだものです。

私はさらに、履物の底の金釘が足の踵に刺さり、細菌が入り、腫れ、体が衰弱しました。マラリア病は再発するので、乞食のような姿になり変わりました。たまたま列車に乗れましたが、人々は近寄ってもくれません。しかし、その中に国民学校四年生ごろの学友崔君と会い、最後まで世話をしてくれました。咸興駅に着きましたが、この駅も焼かれていて、崔君は一駅先なので、お礼を言い、その場で別れました。

わが家のある方へと歩くのですが、体の具合も悪くなかなか足が進みません。ようやく出征したときの家に着きましたが引越してしまい家族はいません。引越し先をようやく訪ねあてましたが、両親はぼんやりとしてしばらく私を見ていましたが「奉植ではないか?」と言って迎え入れてくれました。早速、湯を沸かして体を拭いてくれました。

しかし、私が帰って早々安心したのか、母は六十八歳で亡くなってしまいました。随分苦勞をされていた

のだろうと涙が流れました。しかし、遺体を入れる棺も無いので、遺体を衣服で包み、リヤカーを借りて一人で埋葬しました。その場所は、家族が存命であって知る由もないのです。

数日後の朝、近所の噂か密告を聞いたらしい警察の保安隊員が呼びに来たので、警察へ出頭しました。「母をどこに行かせたか」とまず質問され、続いて東京の学校で在学中のことをいろいろ聴かれました。私は母の埋葬所へ保安員と同行し、掘り返させられ、母の着物が見えたけれども更に掘り出せと言います。私は彼らに殺されてもよいと思ひ、地面を叩いて「いやー」と大声を張り上げました。私服隊員も「もうよい」と言うので埋め戻しました。

よぼよぼとした父も警察へ出頭していました。父は懸命に謝っていました。しばらくして「父を連れて帰りなさい」と言われたので家に帰りました。その時、父は「助かる道は日本へ行くことじゃ」、三男の奉澤こと「邦男」が九州にいるから捜しに行けと勧められ、私は威興を逃亡して、二十八度線は無事越えることが

でき、線路を辿って南へと歩きました。

ある駅で避難民と一緒に乗り、今のソウルへ着き、釜山から小船に乗り、兄を捜しに九州へ着き、後に兄の仕事を手伝いながら、口では言えぬ苦労の後、現在に至り「帰化日本人」として暮らしています。

私にとっての戦後は、戦中にもまさる苦労の連続でした。

## 【解 説】

体験記執筆者、宮本芳男氏は朝鮮生まれではあるが、日本で教育を受け、日本人として軍隊に入営、終戦前の満州で初年兵として、対ソ戦に参加しつつ、終戦後は満州へ朝鮮と逃避の苦労をされた。

特に、日本降伏以降は北朝鮮（北緯三十八度以北）在住であるため、警察の取り調べなどあり、父親から「助かる道は日本に行くことじゃ」と勧められ、若年の頃勉学をした日本、兄の自立している日本へ逃避したのであるという。

ようやく小倉に上陸したが宮崎で兄「邦男」と再会

し土木工事の下請けをしたが、当時は米の通帳がないばかりに違法入国者と見做されたことを知り、おちおち街を歩くことも恐れ、生きた心地がしなかったという。

その後、国籍の件で熊本裁判所で裁判が行われたという。裁判長が「両親のうちどちらかが日本人であると思うか」と質問した時、即答が出来ずしばらく考え込んだところ、裁判長は又も、再度、父母の国籍のことを尋ねたという。母は既に北朝鮮で死亡、父も北朝鮮に残っている故、どちらかが「日本人だと思う」と返答すれば日本国籍が取れたかもしれない、と推測される。

しかし、宮本氏は儒教の国、朝鮮の生まれである。この時、父母どちらも日本人ではない、「いいえ」と答えたと言う。その理由は「父母は私を大変可愛がってくれ、東京の学校へも行かせてくれた。その親の恩を忘れることは出来なかった」からであると言われた。裁判長は彼の心情をはかって「上告するように」と言われたけれども、獣さえも「育ててもらった恩を忘

れない」という、父母を裏切ることとは出来ぬと「上告」を断念したという。

そのため、大村収容所へ送られ調書を取り、理由はともかく送還すると言われた途端、彼の全身は震え「私を死刑場へ送るのか」と、自殺する心算であったという。そのためか担当官の思し召しにより「外国人登録」をし、堂々と娑婆を歩き、人のため、自分のために心身共に努力をしつつ、帰化の申請をし、長女が学校へ入学した頃、名古屋法務局において「帰化」の許可裁定があり、現在に至っているという。

## 無情の世界

### シベリア抑留手記

長野県 片桐 勲

当時のソビエト連邦は共産主義国の総御本家であった。一九一七（大正六）年十月、帝政ロシアを倒して農奴制を解放し、農地は農民のものであると公言、別

名プロレタリア革命ともいわれた社会主義国家が成立してから連邦二十八カ年の歴史が経過した。

一九四五（昭和二十）年九月、満州駐留六〇（七〇）万人の旧日本軍は、理由なき囚われの身としてシベリアの奥地に連行された。唯心を否定し、歴史、思想、風俗、習慣、制度、信仰、伝統、すべて百般を異にする唯物主義の国である。それだけにこの世界には神仏がない、儒教もない、かといって東洋道德的礼賛に偏った訳でもない。また個人的感情を追憶したものでもない。冷静に客観的立場からみて、心情、そして感性、といったものは一片のかけらもない無情の世界である。

将来限らない可能性を秘めた優秀なる若人が、シベリアの雪原に酷寒と飢えと過酷な強制重労働に耐えながら、お互いに元気な姿で祖国の土を踏み、家族の顔を見るまで頑張ろうと、すさむ心を励ましあった仲間が突然帰らぬ人となる。こんな悲しい憐れなことがあるだろうか。肉親の看護もならず墓参も叶わず、今日に至るも遺骨の収集も果たされず、シベリアの雪原に転がり荒涼異国の凍土の地下に孤独に眠る友をどうし